

## 準硬式野球部十五年の沿革

昭和二十六年四月大学創立と同時に旧制高校時代の愛球家を主体とした約二十名でクラブを作ったのが現準硬式野球部の生い立ちである。

### 阪神六大学加盟

昭和二十七年赤松幹雄氏を中心となって軟式野球部を創部した。そして関係各位の御協力により正式に阪神六大学軟式野球連盟に所属する事となった。四月初のリーグ戦に臨み五戦全勝の輝く初優勝を遂げた。九月秋季兵庫県大会に出場、惜しくも決戦で関学に敗れ優勝を逸した。十月からの秋季リーグ戦は優勝決定戦の末大商大を下し連続優勝を飾った。十一月十五日第一回学習院大対甲南大定期戦が学習院大グラウンドに於て開かれた。



### 打撃ベストテンに七人

昭和二十八年五月春季リーグ戦で十戦全勝の完全優勝を成し遂げた。七月岡山に於て開催された第一回西日本大会に出場したが準々決勝で関学に敗れた。続いて八月奈良の第五回全日本大会に初出場し一回戦で東京六大学の雄慶応大学を破る大殊勲をたてたが又も準々決勝で関西大に敗れた。九月からの秋季リーグ戦も春に続き優勝し十一月の第一回関西選手権大会に出場した。またこの年の春秋両リーグ戦に於て打撃ベストテンに七人も入る猛打を示した。

### リーグ戦五連覇

昭和二十九年五月第四回全近畿大学軟式野球大会に参加し見事優勝を飾った。続く春季リーグ戦も九勝一敗の成績で優勝し二十七年春より五連覇。七月第二回西日本大会に出場したが一回戦で敗退した。また東京八王寺球場の第六回全日本大会に出場、これも昨年同様振わず二回戦で敗れた。九月五日から始まった秋季リーグ戦は健闘

むなく七勝三敗で二位に止まった。この年に於てもやはり金銭面の苦勞が絶えず又グラウンドも住吉・青木等を点々と移動し練習に励んだ。

### 近畿六大学に所属

昭和三十年一月に近畿六大学軟式野球連盟より「京都大学が脱退したので甲南大学がその後に加入しないか」と云う話が出たので直ちにその年の四月正式に阪神六大学を脱退して近畿六大学軟式野球連盟に所属する事となった。春季リーグ戦では阪神六大学と違って思う様に試合が運べず六勝四敗で二位となった。二位になれば六月佐賀の西日本大会に参加する事が出来たので出場したが一回戦で関大に敗れた。この夏、春の檀原合宿に続いて高野山に於て合宿した。しかし秋季リーグ戦も春と違い振わず三勝六敗一分の五位という不甲斐ない成績で終わった。やはり阪神六大学と近畿六大学との間にかなりの差がある事をまざまざと目の前に見せつけられた。

### 近六で初優勝

昭和三十一年四月顧問が後藤泰直講師から甲斐道太郎助教授に変わるのを契機にして気分一新春季リーグ戦にのぞんだ甲斐があつて近大と六対六で引分けたが九勝一分の成績をもって創部以来六度目、近畿六大学リーグ所属以来初めての優勝を成し遂げた。この余勢をかって東京八王子の第八回全日本大会に出場し一回戦不戦勝、二回戦横浜国立大学に七対三で勝ち、次いで準々決勝で東北学院大学と対戦し四対〇で残念ながら敗れてしまった。この夏甲南大グラウンドで弁当持参の合宿を行った。九月第三回近畿地区大会に出場し和歌山大を四対三で下し見事優勝を飾った。続く秋季リーグ戦は春季リーグ戦と違い思う様に戦えず和大・神外大・近大に敗れて六勝四敗の三位に終わった。十一月に開かれた第二回関西選手権大会（於大阪球場）では延長十五回の末力尽きて四対三で丸物百貨店に敗れた。三十二年一月部費集めのダンスパーティを宝塚会館に於て開催した。この年の合宿は三月和歌山県営球場に於て行われた。四月から始まった春季リーグ戦は十勝〇敗の成績で堂々完全優勝を成し遂げた。八月第九回全日本大会に出場したが一回戦で又しても東北学院大学に三対一で敗れてしまった。十月第三回関西選手権大会に参加し滋賀刑務所と対戦し三対二で惜しくも敗れた。続く秋季リーグ戦は例年の如く五勝二敗三部の成績で第三位に甘んじた。どうしても秋季リーグ戦に好成績をあげる事が出来なかった。

### 西日本大会初優勝

昭和三十三年この年は三月淡路の洲本球場で合宿を行った。

続く名古屋熱田に於ける第一回全日本大学選抜大会に出場し第一回戦で福岡大と当たが二対〇で敗退した。これに奮起して春季リーグ戦は神外大、和歌山大に夫々一敗ずつしたものの八勝二敗の成績をもって三度目通算八度目の優勝を成し遂げ六月第六回徳島西日本大会に出場し決勝で大医大を六対一で破り堂々初優勝を飾った。しかし八月八王寺の第十回全日本大会では第二回戦で学習院大を四対二で破り準々決勝で三たび東北学院大と対したが、やはり三対一で破れてしまった。十月の秋季リーグ戦はジंकスを破れず四勝三敗三分の成績で第四位に終わった。リーグ戦終了後の十一月第三回関西選手権が大坂球場で開催され、大阪拘置所と対戦し善戦したが九回裏力尽きて一点を入れられ一対〇のスコアで敗れた。



### 法大と延長二十回の熱戦

昭和三十四年三月合宿を高松に於て行い春季リーグ戦に臨んだ。結果は近大・神商大にそれぞれ一敗し七勝二敗一分となり近大と同点決勝を行ったが二対一で敗れ第二位となった。しかし阪大との全日本大会出場権をかけた試合で八対四と勝利を掴み七月三十日よりの第十一回全日本大会に出場した。通算六度目の出場であるが今だに優勝経験がない為何とか優勝しようと張切ったが二回戦で惜しくも中央大に五対一で敗れた。その後北海道の釧路球場にて北海道全日本大学選抜大会参加し一回戦は不戦勝、二回戦に宿敵東北学院とあたりこれを三対〇で破り準決勝に進んだ。しかし法政大との延長二十回の大熱戦を繰りひろげ賞讃された。秋季リーグ戦は主力選手が抜けた為三勝七敗、第五位の成績に終わった。十一月の学習院大学の定期戦も一勝二敗で敗れてしまった。全くこの年はツイていない感じがした。

### 西日本大会惜しくも二位

昭和三十五年三月別府市営球場にて十日間合宿を行った。四月春季リーグ戦が始まったが大経大に連敗したのが悪

く六勝二敗二分で第二位となった。五月岡山での第八回西日本大会に出場し、広島大に四対〇、岡山大に四対一、関大二に五対二で夫々快勝し決勝戦で宿敵関学大と対戦したが十対〇のスコアで完敗し惜しくも準優勝に止った。しかし秋季リーグ戦に入ると圧倒的な強さを発揮し十戦全勝の完全優勝を飾ると共に近六秋季のリーグ戦では初めての優勝、四度目の優勝を成し遂げた。十一月第四回関西選手権に出場し日新電機、大阪大丸、を破り準決勝で山陽特殊とあたったが六対一で敗退した。だが学習院定期戦は二勝〇敗で完勝した。

### リーグ戦連覇

昭和三十六年三月昨年同様別府にて十日間合宿を行った。四月の部継続願いの時連盟が呼称を軟式から準硬式と変えた為我部も軟式野球部を準硬式野球部と改めた。春季リーグ戦は神外大に一敗しただけで九勝一敗で昨秋に続き連続優勝を飾った。八月第十三回全日本大会に出場しあこがれの神宮球場の土を踏むことができた。試合は一回戦で中京大に四対〇で敗れた。秋季リーグ戦は九月八日から始まり大経大に一敗したものの九勝一敗の好成績で優勝近六通算六度目。十一月学習院定期戦は雨の為一試合しか行えず一対一の引分に終わった。



### 四シーズン連続優勝の連盟新記録

昭和三十七年三月四国の今治に於て合宿を行った。四月からの春季リーグ戦は当る所敵なしで十勝〇敗の完全優勝を成し遂げた。この優勝は創部以来阪神六大学を通じて十回目、三十五年秋より四シーズン連続優勝でこれは近畿六大学野球連盟の新記録である。この余勢をかけて八月の第十四回全日本大会に臨んだが、慶応大相手に前半互角いやそれ以上の試合を展開したが、後半力尽き五対一で敗れた。九月に入つての秋季リーグ戦は神商大に連敗、大経大にも一敗を喫し七勝三敗の戦績で第二位に終わった。十一月の学習院定期戦は二勝〇敗で勝利を得た。

## 全日本大会にて優勝候補に上げられる

昭和三十八年三月別府市営球場にて十日間合宿を行い昨秋の雪辱を期して春季リーグ戦に臨んだ。戦績は近大、大経大に夫々一敗したが八勝二敗の成績で優勝を遂げた。七月に入り全日本大会に備えてのオープン戦を行い沖縄遠征関西選抜軍と対戦六対四でこれを破った。八月待望の全日本大会、一回戦で福岡学芸大と対戦し六回表まで四対〇でリードしていたがその裏一挙五点を入れられ逆転、結局五対四で敗れ戦前の予想では優勝候補に挙げられていたが又も一回戦で敗れた。九月幹部交代後の秋季リーグ戦は大経大に連敗、神外大にも一敗し七勝三敗となったが大経大、近大と共に三校同率となり以上三校の間で優勝決定戦が行われ結局甲南が九対三、五対三と両校を連破し春に続き優勝を飾った。十一月の学習院定期戦は甲南大グラウンドに於て行われ二勝〇敗で勝利を得た。三十九年三月山口県徳山に於て第一回卒上田氏、第七回卒榎本氏の参加を得て例年通り十日間行った。四月からの春季リーグ戦は又も大経大に連敗し一時は優勝絶望かと思われたが最後まで望みを捨てず結局八勝二敗となり昨秋同様大経大との間に同点決勝が行われ六対〇でこれを破り二度目の三連覇を成し遂げた。八月の全日本大会では早大を二安打に押えながら、一回戦の壁を破る事が出来ず四対一で破れた。九月新チームでのリーグ戦は大経大、近大、神商大、神外大に各一敗を喫し六勝四敗で第三位となった。投攻守にいま一步の安定性を欠き神商大に優勝を許したが現在試験中も休みなしのハードトレーニングと優勝奪還を目指し部員全員大いにハッスルしている。



昭和39年 秋季 O.B戦

## O B 賢言

### 創設当時の思い出

第一回卒業 赤松 幹雄

昭和二十六年四月甲南大学開学と同時に掲示板に貼られた一枚のポスターにより同好の志が集まり、第一番に名のりをあげたのが準硬式野球部（当時は野球部と称していたが）であった。勿論全学通じて唯一の部であり学友会なるものは未だなく、すべて部員の経済負担により成り立ち実質的には同好会的なものであった。高校時代軟式野球部で基礎的な野球から身につけて来たものが殆んどであり技術水準はきわめて秀れていたから、練習よりもむしろ先ず十数名の部員の調和を計りチームワークを整える事が急務であった。何もない所へ急に十数名が寄り寄り部を作り試合をしたところで誰がどのような長所を持っているかも全然分らず、唯めくらめっぽうで九人選び、試合に勝つどころか、試合をするだけで精一杯であった。初試合である神戸外大戦に十三対十二の大乱戦のすえ破れ、以来実に十連敗を神戸大学、神戸商大、神戸医大、等相手に重ね新設チームの弱点をさらけ出した。当時の我々の記憶では、個人個人では力一杯やっているが、なんとしても勝てないと云う一つの壁の様なものに苦しんだ。敵は相手チームではなかったのである。これではいけないと皆が気づき、沈滞しかかる気分をひきしめ氣勢をあげるため、神戸の「すし屋」の二階でコンパをやり、他方遠征でも立ち直りのきっかけを掴もうとローカル線に乗り丹波篠山の兵庫農大におしかけた。お城のある町、ひなびた丹波高原の町は実にのどかであり、我々を気分よく迎えてくれた。試合の最中牛が荷車をきしませながらノロノロとグラウンドを横ぎれば両軍これを笑顔で見送り再び試合開始。こんな中で終始のびのびと試合を運び第一戦は村井投手をおしたて創設後初めての勝利を得た。続く第二試合では、外野手より転向した緒方投手の初登板でこれまた勝利を得、都合二連勝を飾った。気をよくした我々は中二日をおき再び汽車の旅を楽しみながら修学旅行の中学生よろしく、はしゃぎながら山陽道を西へ姫路城の真下にある球場で姫路工業大と対戦、勝利をおさめた。途中降雨の為正味九回はやらなかったが、この三試合で以後の七連勝（十連敗させてくれた全ての相手におかえしをしたはず）のきっかけをつかみ、やっと甲南大学野球部の存在だけは示すに至った。この頃になるとなんとかチームカラーらしきものが見えて来た。当時私の感じたところでは、他校における様な厳しい規則、口やかましい規律と練習よりも、ラフなムードにより運動部生活をエンジョイさす方が十割の実力が発揮され又十分成果をあげ得た。最善をつくした上での勝負の結果に

対しては全くこだわりがなく実に淡泊そのものであった。負けても気分転換が速く、明るいのびのびした前向きのムードを常に持っていた。皆これから強力なチームになるんだと云う自信を問わず語らずのうちに持っていた。徐々に上る実績と活躍は学内に於て他の運動部設立の機運を促進させ、野球部は運動部のケン引車的な役割を果たしていた事、第一回卒業の人々は多分に認めて下さる事と思う。この活躍も当時の連盟理事木村氏(関学OB)関学チーフ・マネージャー若林定雄氏、等の新しいチームに対する暖かい御支援と、種々の御心ずかいなくしてはあり得なかったと今もって感謝している次第である。丁度この頃新規に設立せんとしていた阪神六大学リーグより加盟の誘いがあった。本校は近畿六大学か関西六大学に属したかったが、実情はそんな甘いものではなく、とうてい望まれぬ事とあきらめをつけ、阪神六大学リーグよりの勧めに応じ、二十七年一月大阪で設立準備打合せ会に出席した。兵庫県側の甲南大と姫路工大は、大阪側四校に対し数の上で劣勢であり、議事に於ける取決め等で何となく不利な立場におかれた事は今でもにがにがしい思い出として残っている。リーグ戦開催場所も南大阪となり、姫路工大の不利は戦わずして明白であり大いに同情した。その埋め合せに第二回目の秋季リーグ戦には甲南大が当番校となった為、開催地を芦屋の神戸銀行球場に持って来たがこの時は大阪側の一部からの苦情を丁だいたした様に思っている。

第一回阪神六大学リーグ戦の正確な記録が手もとにあるので要点をしるしておこう。

順位	校名	勝	負	得点	失点	打点	打率	失策
1	甲南大	5	0	62	11	62	2.98	10
2	大阪商大	4	1	32	27	21	1.95	19
3	姫路工大	3	2	39	19	30	2.75	15
4	大阪商大	2	3	36	38	24	2.54	22
5	大阪工大	1	4	24	33	19	1.84	18
6	社会事業大	0	5	17	82	12	1.82	43

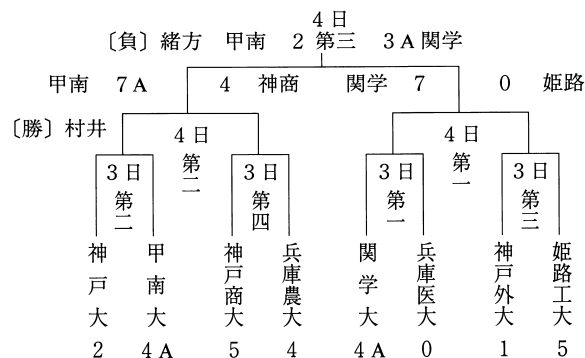
全試合が先攻で全得点が打点によるもので、個人タイトルはすべて甲南大でしめた。

- ① 甲南 25 - 2 社会事業大
- ② 甲南 10 - 4 大工大
- ③ 〃 15 - 0 大阪商大
- ④ 〃 5 - 1 大商大
- ⑤ 〃 7 - 4 姫路工大

最優秀選手	緒方 哲男	投手
首位打者	高橋 利栄	投手・外野手
本塁打	高木 豊信	捕手
打点	〃	〃
四球	藤原 博一	一塁手

別掲のこの数字で判断願えると思うが圧倒的な実力差での優勝であり、又思い上りと云われるかも知れないが、いつまでも属すリーグではないと秘かに考えていた。裏話であるが当時私は折をみて連盟理事木村氏に現状に止どまる事の不満をもらし、おしかりを受けた。しかられるのが当然の話だと思っけれども。

阪神六大学リーグの優勝、それも一回では未だ実力をそれ程認めてくれない。それならば兵庫県大会で最強の関学大を倒してやれと斗志を燃やし関学をマークした。我々の頭からこの念願は常に消えなかった。他のチームはもう問題ではなくなった。九月に明石球場で行われた兵庫県大会兼国体予選の記録をお目にかけよう。(二十七年九月三日~四日)



決勝戦は八回裏PH・村井、池浦の三塁打と短打で二点をかえしなお逆転のケースとなったが、永石投手におさえられ惜しくも敗れたが全般的に見てそれ程力に差がなくなってきた。

三試合での両校の記録(神戸新聞より)

	打数	安打	塁打	得点	失点	失策
甲南	92	19	24	13	9	8
関学	86	21	29	14	2	2

五分五分とは云にくいだが、失策、失点をのぞけば、まず対等であった。甲南の相手チームは関西六大学二校と近畿六大学一校であり関学の相手チームに比し、レベルが上であったため確かに強くなったと自他ともに認められたことは云うまでもない。事実兵庫県に於てはこれ以後逆に関学からマークされる様になった。続いて二十七年秋のリーグ戦は九勝二敗でもって連覇をなし逃げ、攻守ともに阪神六大学ではバランスのとれた最強チームと云われる様になった。当時のスポーツニッポン新聞社の編集長桐山氏からもおほめの言葉を何度かいただいた。又大阪側の総大将格である関西大学の主務古川氏にも眼中に入れてもらえる様になって来た。当時の我々の願いは関大、関学、同志社、立命に対し先ず一勝をあげたいということであった。これの第一番の槍玉にあがったのは公式戦ではないが、二十八年甲南大グラウンドに於ける関学大に対する完勝であった様に思う。話をもとにもど

し二十七年秋の記録を示すと、

1. 甲南大 9勝2敗
2. 大商大 8勝3敗
3. 姫工大 6勝3敗1分
4. 大歯大 4勝6敗
5. 大工大 3勝7敗
6. 社短大 0勝9敗1分

● 最高殊勲選手 高木豊信 捕手

● 首位打者 藤原博 一塁手

ここで特筆しておきたい事はかねがね学習院大学と定期戦を結びたい旨、内藤主将の令兄（学習院大）を通じ申し込みをし、交渉を続けていたのがようやく具体化して来たので、リーグ戦中ではあったが内藤主将と私の二人で急拠上京、細部の打ち合せを行った。二十七年十月二十四日であり、対社会事業大戦は池浦氏を代理主将とした。東京では学習院狩野主将、チーフ・マネージャーの誠意ある対応ぶりで話はとんとん進み、十一月十五日定期戦、十六日早稲田大とのオープン戦が決り、後援の新聞社への事もすらすらと運んだ。

こうして十一月十三日神戸発の急行列車で丁度、東西大学王座決定戦に行かれる連盟理事の木村氏と共にチームは上京した。定期戦の話は別にゆずるとし、ここでは5A—0で第一回の勝利を得たことに止どめておこう。チームの世話役として内藤氏と共に、未だ目標には程遠いが、第一段階としてはこれでまず満足すべきであり不動の基礎はこれで出来上ったと思っていた。この次に、草分け時代よりのバトンを受けついだのが池浦主将であり、更に隆盛期に入り近畿六大学リーグに昇格できる原動力になったわけである。

ちなみに、二十八年六月八日よりの近畿大会（山本球場）前のスポーツニッポン新聞の大会予想記事を附記してみよう。『優勝候補の筆頭はまず甲南大とのウワサが高い。阪神六大学リーグ戦での三連覇の余勢をかって自信満々。このチームの強味は昨年と陣容不動ということで投手団は、老練緒方、速球高橋と質量兼備の主戦投手の他これを援ける村井が最高調と伝えられ、一方打撃も西村、伊藤、高木とならぶ他、トップからラストまで切れ目なく守備のチームから打撃のチームに塗りかえられ優勝の呼び声は高い』この時はこの予想通りで優勝した。又第一回西日本大会（二十八年七月三十日より岡山県久世町）の予想も『新鋭甲南は緒方、高橋、増田と優秀投手陣を擁しAゾーンでは関学大を倒す公算も少なく』とあった。だがこの時は一回戦は五対一で松山商大を破ったが我々決勝の対関学戦は延長十回二対一で惜しい試合を逃してしまった。これらは二つとも新主将池浦氏以下の努力のたまものであると大いに評価できることは私の言をまた

ずして、スポーツ新聞予想記事を通じて知っていただきたい。

創立十五年と聞いて、もうそんなになったのかと実はおどろいたものよく考え、思い出すと云い表し得ない苦労が多々あった様である、それが今日に全てつながっているとは云え、今一層の躍進を遂げられていることを知り過去の輝かしい歴史を誇るよりも今後の栄光を祈りたいと思う。

### 「回想」

第二回卒業 長島 孝次

筆者が甲南大学を卒業してから早や八年近くの年月が過ぎようとして居る。月日のたつのも早い、学生時代がついこの間のような気がしてならない。筆者は第二期生であり、野球部創生期のメンバーの一員であるが、とにかく試合に負けた覚えが少ない。大学創立と共に、現在の準硬式野球部が創生したが、大学創立時でもあり、色々苦労があった。割当てられる部費も少なく、用具の仕入れにも運道具店に頭を下げ通して仕入れていた。ダンスパーティー等もよく催したが、出演バンドに出演料を値切ったり、会場使用料の一部を踏倒したりした事を覚えて居る。又合宿等も思うように出来ず、確か一度だけ柏原に行ったと思う。遠征費も殆んど部費の自費で購っていたが、それでも、今から思えば強力なメンバーが集ったものだ。殆んど硬式野球の経験者であり、甲子園の全国大会出場の実験有るスタプレイヤーも数人居た。常にA級の力を持っていたが、現在も良く伝統?を守り、優秀な戦績を残している事は、我々OBとしても、嬉しい事である。この間新聞紙上で応援団の不祥事を知ったが、先輩として悲しむべき事であるが、応援団の解散を淋しく思った。何故なら、応援団の創設後、最初に応援したのが我が野球部である。学習院定期戦の時であるが、普通列車で全団員が東京まで応援に来て呉れたが、リーダーが他校の応援団員で、応援する度に一々ベンチまで選手の名前を聞きに来た。今から思えば笑話である。当時の選手には、いわゆる侍が多く、色々個々に面白い思い出があるが、又別の機会に御紹介する。卒業後同期生と会う機会があまりないが、現役諸君の話に依れば恒例のOB、現役対抗戦等にも第二回生の集まりが一番悪いと聞く。この紙面を通じて同期生諸君の御協力を願うと共に一度同期生だけの会合もしたいと思う。又先輩としてこれから社会に巣立って行く現役諸君に言いたい事は、実社会では人の和と云うものが最も大切である。野球生活を通じて、試合に勝つことばかりでなく、団体競技でチームワークが如何に大切か、己を殺して己を生かすと云う事を知ってもらいたい。最後に不幸にも交通事故で散った同期生、奥田呈三君のめい福を心から祈る。

### 「苦しくても又楽しかった榎原合宿」

第三回卒業 北山邦太郎

野球部の思い出と云えばやはり何と云っても、合宿訓練のことである。

あれは、三十年の春であった。

大阪の近郊、榎原神宮の外苑にある市民グラウンドで合宿を行った。その年は、甲南第一期黄金時代の先輩諸氏が卒業され、チーム力は非常に弱体化していたので、橋本監督(現日商勤務)の統率の許に、チーム強化のためのスパルタ訓練が開始されたのであった。何分その年は天候不順のため、春と云うには程遠い寒さで朝夕の冷えこみは特にひどかった。我々の宿舎には公民館を借りた。真中に広い土間があり、両脇に二十畳ばかりの寒々とだだっぴろい部屋が一つづつ。その上、風呂といえど露天風呂、いかな風呂好きの私もあの時ばかりは風呂に入るのがむしろ苦痛であった。スパルタ訓練とカンタンに云うが、実にあの時の訓練は、筆舌では言いつくせないきびしさであった。訓練のみならず、当時の経済状態の方も(部の予算)非常にきびしく部員の方にはずい分と迷惑をかけたと思う。しかし、その苦しさの中にもなつかしい思い出が数々残っている。強化合宿の後半の或る日のことだった。練習が終ってからの楽しい夕食後“マンジュウの早食い競争”を行ったのである。部員が二つに分れ、それぞれ一人づつ選手を選んで、二十個のマンジュウの早食いを競うのだ。選手として、当時キャッチャーとして活躍しておられた今は亡き奥田氏と、ショートを守っておられた近江五郎氏(現安宅産業KK)が代表として選ばれたのだが、この二人が揃いも揃っての酒豪であったのだから全く皮肉と言わざるを得ない。やがて二十個のマンジュウは、部員の見守る内に次々と平らげられて行く。応援に廻ったものは、これ又、この勝敗に賭けをしているのだ(一人百円位づつ、だったと思うが・・・)食べる者、応援する者、大体の御想像はつくだろう。さて結果は、亡き奥田氏に、一個の差で軍配が上り、破れた近江氏“マンジュウ怖いや”的一幕である。このような数々のエピソードを作り乍らもきびしい訓練に皆励んだ。そして、我々野球部の実力が認められて、近畿六大学野球連盟に加入出来たのは、正にこの年であった。これも偏に先輩諸氏のご活躍の賜物であることは言うまでもないが・・・。

### 思 い 出

第四回卒業 橋本 正昭

私が甲南大学を卒業してから、早七年になろうとしています。その間我甲南大学野球部よりも、多数社会に行き、各方面で活躍されている事を聞き、本当に喜ば

しく思います。特に勤務先でも、野球をされている話を聞くと大変嬉しく思っています。OB会が結成されて、毎年の総会又親善試合が行われている事も私の楽しみの一つであります。そして旧友とチビリチビリとやりながら昔話に花を咲かせている時には時間の過ぎるのも忘れてしまいます。今回部誌が発行される事になり、在学時の思い出を書く様依頼され、筆無精の私ですが、当時を思い出しながら思いついた事を書こうと思います。私が甲南大学に入学したのは昭和二十九年、野球部は、阪神リーグに所属して居り、野球部歴は浅いけれども、実力十分、リーグ戦では勿論、対外試合でも好成績を上げていました。メンバーは、名実共に高校時代より一流プレイヤーばかりで、レギュラーは大半が三・四年生、特に私のポジションである内野は皆上手な人ばかりで、高校時代少し天狗の鼻だった私も、これではとても試合に出られそうにもないと思っていました。しかし二・三ヵ月練習している内に、ナインの人達とも打解け何とかやれる自信らしきものが出てきました。私の学生時代最も印象深く、今思い出しても大変なつかしい試合の一つとして、入学してまだ半年もたない夏の全国大会があります。対中央大学との試合、一点リードされ、八回二死ランナー三塁の時でした。監督の池浦さんがタイムをかけ、ベンチの方に向い、選手の顔を見渡された。この時監督の目と私の目とが合ったと思った途端「ピンチヒッター橋本」と指名された。私は胸をドキドキさせながらも監督、先輩ナインより色々アドバイスされている内に、試合の雰囲気より見て、こゝは一番思い切った根性で行ってやれと思い“盲蛇に怖ず”の例の如く、第一球より大振りして行った。少しねばった後カウント二一三となり、結局は三振に終わりましたが、後で考えると私はその時完全に上っていたと思います。二一三の後の球は真中の直球であり、普通の場合ならば、十分打つ自信のある球であったと思います。しかし私が上っていたのも無理はなかった。田舎出の私が初めての全国大会出場であり、その前の西日本大会には参加して、大学の大きな大会の雰囲気には少しは慣れていたが、まさか試合に出られるとは思っていませんでした。この夏の全国大会終了後、四年生は引退し、新チームとなり、私は三塁のポジションを与えられた。その後、幾多の試合、遠征があったが、いずれもなつかしく思い出されるものばかり、私の長い野球歴の中でも一番楽しくゲームが出来た時代です。四年生の時主将に選ばれましたが、この時季が私の青春時代の最も華やかな時であったと思います。勉強の方は、さぼりがちでした。が野球には全力を注ぎました。メンバーも榎原三次、辻本君と二人の完投投手を持ち三年生よりレギュラーとなり試合経験豊富な選手ばかり、当時

としても大型なチームであった。夏季リーグ戦では各三人の投手が三勝ずつ残り一勝は下級生という様に理想的な投手ローテーションにより完全優勝しました。又佐久間君のリーディングヒッターを初め打撃ベストテンの内には我々チームより二、三人は入っていたと思います。そして大学対抗だけでなくノンプロ相手とも積極的に試合をし戦力向上に努めました。私の大学時代の思い出としては、楽しい事ばかりではありません。残念で残念で仕方がなくもし出さければもう一度学生時代に返り成しとげたいと思う事が二つあります。その一つは関西六大学に全部勝ち起す事でした。当時関西学生野球連盟は関西六大学、近畿六大学、阪神六大学とあったが、その内関六が歴史も古く有名な為すべての面で我々より優先していた。私はそれが悔しくて仕方がなくなるとかして関六に勝ち日頃の鬱憤をはらしたかったので次々に各大学に挑戦していった。京大、神大には問題なく勝ち、関学には練習試合と関西選手権で又関大には国体予選に於て勝った。次に同大、立大に挑戦したが全国大会出場があるとの理由でことわられてしまった。当時としては十分勝つ自信があったから試合出来なかった事は誠に残念です。もう一つは全国大会で二年連続東北学院大学に負けた事です。それも名前は忘れたが同じ投手に押えられたのですから返す返すも残念で仕方がありません。“井の中の蛙大海を知らず” 関西にばかり気を取られ対全国大会に備え相手チームをよく研究していなかったのに原因していたと思います。現在私は会社でも野球をしておりますが、学生時代の私はインサイドベースボールが不足していたと思います。会社では元プロ野球、ノンプロ、大学等の名選手と一緒にプレーしておりましたから今になってわかった事です。学生時代になれば良い監督、コーチがおられませんからどうしても唯、投げ、打ち、守るだけの野球になりそれに自分等の練習に気を取られ相手チームの研究等が怠りがちとなります。後輩現役の諸君はこの点十分研究され悔のない学生野球を楽しまれると共に私の出来得なかった事を成しとげて致したいものです。最後に今回の部誌発刊により一層甲球会が発展して行く事を期待して居ります。

## 創刊号に寄せて

第五回卒業 近江俊雄

念願の野球部部誌が皆様の力で創刊されることになり、私も本当にうれしく思っている。創刊に当って、寄稿の割当てが来たが、小生も卒業後足掛け七年にもなるので、細かいことは忘れてしまっている。しかし年に一・二度は同期生が寄り合ってワイワイやっている内に酒とともに思い出し、時間のたつのも忘れて楽しく話し合っている。

これからもおそらく何年たっても同じ話しをすることと思う。

故奥田先輩が尼崎市民球場の対近代戦で、ホームスライディングシテ寸足らずになり、這い込んで貴重な得点を挙げられたファイト、日頃おとなしい川森先輩や同期の林君がバットをもって喧嘩に駆けつけようとしたこと、連盟の木村理事に橋本主将が学生野球にはヤジがうるさすぎると叱られたこと、徳島のストリップ劇場で幕間に電気がつくと全員見ていたこと、佐賀遠征の帰途別府に立寄り一文なしで一泊し「カネオクレ」の電報を打ったこと等々練習、試合、合宿、遠征と良きにつけ、悪しきにつけ、朝目をさまして、夜眠るまでのすべてが愉快であり、ある時は又苦しかった思い出一杯である。振り返ってみると、橋本博光主将の時、阪神六大学から近畿六大学に入れ替り、翌年中川主将がリーグ戦初優勝をはたし、続く橋本正昭主将がリーグ戦優勝は勿論、関六上位校及びノンプロの強豪を倒し、私の時代も西日本大会に幸いにも初優勝出来たこと等、在学中は全く怖いもの知らずのチームとして自信を持っていた。しかし野球をやって一番大切なことは記録を残すことより全員一致でチームを育てることにあり、チームワークが大切であると同時にしんの強い落ち目になった時に強く切り抜ける精神力を養うこと、エラーをした人をカバーしてやる協力的な態度が取れるようになること等、精神的な面が、最も重視されるべきであると思う。

ここで思い出の試合を一つ。

負け試合ではあるが、八王寺市で開催された第十回全日本大会に於ての対東北学院大学戦が忘れられない。このチームは二年連続惜敗しているの、何としても勝ちたかったし、勝てれば全日本制覇も夢ではなかった。ゲームは日程の都合で夕方から始まり、五回にはライト右に日も沈み、間もなく夏の月がレフト後方に顔を出し、投手の玉も手元に来ないと見えない。バッテリーのサインもあってなきが如し有様。だから攻撃の度にくずすのは今だと思ひ苦肉のバント策戦等に出たが、今一步の所でついにチャンスをつかめず相手のペースに巻き込まれてしまった。だが全員最後まで必死に戦い、特に辻本、谷口のバッテリーの活躍は実に立派で、言葉では言い現わせない。試合後、辻本君は連盟本部に涙の抗議をし、谷口君は一人暗闇にしゃがみ込んで嘔吐するまで頑張ってくれた。私としても勝てる自信が過信であったことが、負けを導いただけに心残りであり今でも同期生に責められている。残念な試合だったが一番印象深い。その他練習、試合それに随伴する部生活に色々と思ひ出多いが、文章も下手であるしこれ位で勘弁して戴くことにしたい。最後に野球部の発展を心から祈って止まない。

「あゝ辛かった・楽しかった」

第五回卒業 梶木 善夫  
部誌を発刊するから何か原稿を書けと云われたが、急に云われても何も出て来ない。

思い出は全てがトグレットギレの断片、これではとても文にはならない。そこで徒然なるままに思いをめぐらし、悪いお脳に浮んだ事柄をデタラメに書きます。従って年月が相前後する事を予めお断わりしておきます。

○年○月△日

国体予選、相手は滋賀代表湖友クラブ。場所は淡路三熊球場、橋本(正)さんから近江君へバトンが渡ってから第一戦である。一塁ランナー桑原さん、バッターは梶木。ヒットエンドランのサインが出た。桑原さんは長駆生還、全く気持の良い一打であった。最初の試合で極めて遠慮勝ちにサインを送っていた近江新主将もさぞ快心の笑を浮かべた事であろう。

○年○月○日

野球部のコンパが有馬の中の坊で催された。総勢三十名、それで一斗の酒を見事飲み干したのには驚いた。俺や辻本、松本君のように飲めない連中も多かったのに……。近江、高州、越知らの酒豪は一人で一升近く消化したのではないだろうか。それでもまだ飲み足らず、夜中、現金を持って酒を買いに行ったという。明日も練習あると云うのに……。

○年○月○日

全日本大会が行われた八王子の「かねや旅館」。初日に先輩のK氏が友人に会いに行ったまま外泊。部屋の一同大いに怒り「これでは後輩に示しがない」とK先輩の一物にタブソールを塗り、懲しめようと決議。“エムタブ”との新語産まる。

○年○月○日

西日本大会の徳島の旅館。辻本(逆立ち屋の金悟楼)、松本(ケイゾウ)、西田(ロク)、池上(サンデー)早船(ドビン)、榎本(スッポン)等の悪童と共に「楓の間」に陣取る。丁度女中部屋の隣り、暑い最中であった為、宿の女中さんもその寝姿はアラレもない。一番若い可愛イ子ちゃんも御多分にもれずパンツのまま。隣室のナイト達にスッカリ気を許しての高イビキ。朝方、便所の帰りにその部屋を覗き、パンティの上から一番大切にしておいた神聖なる個所を指で一突き。部屋へ逃げ帰って布団を頭から被っての狸寝入り。それまで白河夜船だった松本君がこの騒ぎに眼を覚し、追いかけて来た女中さんに犯人と間違われ、以後甲南一の要注意人物とされたのは気の毒だった。

○年○月○日

練習中、イレギュラーした球が烈しく顔面に当る。あゝ

痛い。そこへ先輩の叱咤の声が容赦なく浴びせられる。思わず涙が落ちる。「怒鳴り散され、顔で球を受けながら、何故こんなに一生懸命やらねばならないのだろう。タカが一コのボールを大の大人が追い駆け廻さねばならないのか?」こう考えると全く馬鹿くさい。しかしこれを実社会に就いて考えて見よう。ボールは金である。生活の糧が金であるならば、それを求め努力し奔走するのは当然ではないか。自分が掴まなければどんどん逃げて行き、誰かが掴んでしまうのである。上手く掴んだ時の嬉しさ、後逸した時の口惜しさ。全く難球を捕った時には、焦付き債権を回収した時のように嬉しい。トンネルして掘際まで追いかけて、やっと掴んだ時には既にランナーはサードベースを廻っていた。丁度資金繰りを誤り、無念不渡りを渡した姿に似てはいないか。かく考える事により、球はより厳しさを加え、まるで生き物のように我々に迫る。しかし我々はよりガメつくより慎重に球を掴まねばならない。いつの間にか猛烈なファイトが湧いて来た。

「さあ来い!」

「もっとキツイノック打たんか!」

「ノッカーどうした!」

「野球部の四年間」

第六回卒業 谷口 裕信

私は三十年六月に入部しました。その間のいきさつを述べてみます。当時の主将中川さんと主務唐木さんが私の友人の勧誘に来られた。そして学友と一緒に私も入部を勧められたのです。その時「もし入部したら、八王寺の全日本大会に出場させてやる」と甘い言葉にまんまとのせられて入部してしまった訳です。ところが見ると聞くとは大変な違いで、八王寺へ行けることは行けるが自費で行かなければならなかった。当時の私はだまされたものと思い、遠征には参加せず、毎日ぶらぶらと過して居りました。ところが夏の大会が終ると、主将も橋本さんに代り、部から呼び出し状が来て入部した訳である。新チームの初試合の時、幸運にも私はデビューしました。その時の記録はまぐれながらも二塁打が出た事を憶えている。甲南大学軟式野球は他リーグから素人野球のように思われていたので、そういう大学に先輩達は反撥を感じていたように思う。それで手近の大学から片っぴしから対戦してそして勝っていった。その年は新興チームとして、自リーグと共に他リーグにも名声を上げた。私が三年生になってから、部の空気はそれを基礎として一段と前進した。そして我々は先輩の礎かれた伝統を維持する事に責任の重大さを感じた。近江主将の時、西日本大会優勝した事は一番の思い出に残っている。その時は自分としても最高調に近かったし、どこと試合をして



も負ける気がしなかった。円熟した四年生と伸びざかりの三年生の力がうまく一致して、それが一番の強みであった。私が最上級生になると主将に任命された。今から思うと、私が主将になったのはサボリであったからではなかろうか。しかし自分としては野球に対して信念と情熱をもってやったつもりである。釧路での全日本選抜大会の時、我校は長年の宿敵としていた東北学院に初めて勝てたという事と、その大会の準優勝で法政大と延長二十回で対〇で負けたが主将として非常にやりがいがあったものです。楽しかった思い出の中には、西日本大会の時の徳島に行く船中で、その船の中に女性が乗っていたが、その女性が酒、タバコを飲み、我々は「おかしいな!」と思っていたところ、その女性はストリップ劇場のスターであった。それで徳島に着くと、佐々木さん林さんの三人と一緒にストリップ劇場に出かけたのです。ところが幕間で電気がつき、明るくなって周囲を見ると、我が野球部の部員二十六人中、二十三人までが入っていたのです。

最後に、私が野球部に入って、良い先輩と同級生及び後輩を持てた事は、入部して大変良かったと思い、又十年間野球をした事によって人格が作られたと思います。これが社会に出て、会社の幹部に席して役立っているように思います。

### 「私が野球部生活で得たもの」

第七回卒業 榎本 俊一  
昭和三十二年、当時の甲南チームは第一期黄金時代になっていた。一米七十・六十キロ以上の体格の持主がづらりと並び、四年生と三年生の充実振りは安ど感を感じさすメンバーであった。然し三年、四年をもう上げるべき一・二年のスタッフが少しこれに比較して見劣りしたのは私の見間違いであったであろうか。特に一年のメンバーは芦屋高校からの松本敬三、長田高校からの私との二名が早くから練習に参加していたが、両名とも軟式野球の出身であり、高校在籍中は県大会の準決勝で芦屋と長田が対戦、二対一をもって芦屋が勝っていますが、この時の芦屋の捕手が松本であり、長田のエースとして活躍したのが私でありました。こんな因縁もある両名ではありますが、私の方は中学・高校時代に二度も肘と肩をつぶした事があるのでそれが一番心配でした。案の定、合宿に入る前、私は練習中バッティングピッチャーとして投球中、三年の梶木氏の背中にぶっつけたのが悪い意味のきっかけとなり、肩を適度にかばい出し、思いきって投げる事が出来なくなり、手首だけで投げる為、球が何処に行くかわからないという状態になってしまった。という事は一年のメンバーとして使えるのは捕手の松本一人という

状態で和歌山の合宿に入る事になってしまった。その合宿で不幸にも攻守の要、佐久間氏がスライディング練習中に足を骨折するという非常事態が起きてしまった。これは非常に重大な出来事であり、それだけに急拠新人松本に寄せる期待が大となった。そして不幸中の幸か、この松本が練習中に和歌山県営球場でワンバンドでオーバーフェンスをする痛烈な当りを示し、周りを驚かせたものであった。

その後、知らぬ間に松本は“ウマ”というニックネームがついていたが、これは顔が長いとかどうとかいう事ではなく、すごい馬力があるからついたネームだと私は今でも思っています。それ程体格は良い方ではないが、本当に松本には馬力がありました。その間私はボールキーパーが精一杯という所でバッティング投手としては投げる事も出来ない状態ではありましたが、不思議にカーブバッティングの投手としてだけは投げられるという事である為、完全に肩を痛めて再起は不可能と私は判断しておりました。しかし先輩とは有難いもので、この再起不能と思われる私に対しても見捨てる事なく、練習後は先輩自らが捕手となり、この新人の私の再起を促したものです。この頃の私は「本当に野球を止めたかった。然し再起の努力を促してくれる先輩に対して、野球をほうり出す事は出来なかった。私自身、再びボールを満足に投げる事が出来るようになるとは夢にも思っていなかった。たとえボール拾いが出来るだけでも満足だ思うように努めなくては・・・。」と思っていた。だが二年後にこの私が公式戦にも投げられるようになるとは思っていませんでした。だがこの頃の三・四年が充実していた為、一年のひ弱さが目立たなかったし、松本独りが一年生を背負って大いにハッスルしていました。その後一年には中村(投手)、津田(投手)、山上(外野手)など将来有望な選手や、初めから使いものにならぬ選手が入っては来ましたが、直ぐ止めてしまい、その内にこの一年、つまり七回生を代表する選手が続々入って来ました。西田六郎(後キャプテン)、早船進(後マネージャー)などがそうでありました。そしてこの七回生が一・二年で下積みして練習に努力している間は、近六で優勝はもちろん、全日本大会出場、西日本大会優勝と輝かしい実績を作って行き、甲南大の黄金時代を築きあげ、六回生、七回生を主力とするメンバーに受け継がれた時、私が最初この六・七回生の一・二年時代に三・四年と比較してスケールの小ささを心配しましたが、それが事実となったようでもありました。四年(六回生)には福山、谷口という一級のバッテリがおりましたが、この四年を助ける肝心の三年生がひ弱さを感じさせたものです。然しこの三年、つまり七回生は恵まれない体格をより以上の努

力、技術でおぎなっては居りましたが迫力に欠けるものがありました。七回生のメンバーをみますと。ロクこと西田、ウマこと松本（当時は四年の谷口捕手との関係でショートにコンバートされていた）、ドビンこと早船、ナカナカこと中沢、ヤブレこと辻本、サンデーこと池上、スッポンこと私、シオこと潮崎というメンバーでした。この内三塁西田、ショート松本、センター中沢などは常時出場し、大いに頑張ったものです。又一年当初より入部しながら再起不能として忘れ去られていた私を春のリーグ戦で当時エースの福山さんが対神商大となると食い合せか勝星に恵まれない所から思い切って先発させた所、エース福山さんにしめくりを頼む七回まで投げ抜き、入部三年目にして公式戦初の白星を上げる事が出来た事は今だに頭から離れません。そしてひ弱さを感じさせた六回・七回生により構成されたメンバーが堂々と近六で勝抜きオープン戦では関六を総ナメにし、北海道選抜大会では準決勝まで勝進み、延長二〇回の末法大に惜敗するという遠業をなしとげたものでした。この時は四年生の活躍は勿論、内野手早船の活躍も又素晴らしいものでありまして、その他三年生西田・松本・中沢・辻本なども大いに活躍したものでした。

あのひ弱さを感じさせたこのメンバーがここまでやれた事は各自の並々ならぬ努力と共に先輩諸氏のアドバイス、それに先輩が築きあげられた伝統という目に見えない力がここでもすでに目芽えていたものと思われまます。

そして北海道大会後六回生より七回生にチームが引継がれ、主将西田、福主将松本、主務早船という新幹部が誕生したのです。しかしながら新チームによる秋のリーグ戦では勝てる事は出来ず、厳冬のトレーニング、春の合宿にすべてをかけ出直すことになったわけです。この頃主将西田は相当苦しんだと思います。投手では四年の私は使えず、池上は技巧派投手で連投に耐えるかどうかという事で、いきおい下級生の投手に望みをかけなくてはならず、別府球場に於ける合宿では血のにちむような練習を行って春のリーグ戦に臨んだのでありました。そして実力では変りのない近大に優勝をさらわれたというものの、堂々二位に食い込み西日本大会への出場権を獲得したわけです。この春のリーグ戦では弱体と思われていた投手池上が別府の合宿の成果を上げ、連投につぐ連投に耐えぬきリーグ戦を投終えた事は実に立派でありました。そして西日本大会では一・三回戦を池上、私そして下級生の投手リレーで相手を押えと共に、腕力ではチーム随一の西田、馬力のある松本、確実味のある早船、足も早くシャープな打撃陣の打撃にも火が付き、決勝まで進んだのです。そして決勝では惜しくも関学に敗れましたが、ここ

までチームを引張った主将西田、それにこれを盛上げた他の四年生や下級生、米子球場にて優勝は逃がしたものの全員出来るだけの事はしたと思う満足感が顔に表われて居りました。又この時の米子の観客は八十%までが甲南を応援していたものです。この時の事を松本は、

「我々は出来るだけの事をして試合にのぞんだ、満足だ、そして観客がこれだけ我がチームを応援してくれた。他人にも愛されるチームになっているのだ。勝負である以上勝つ事も必要だが、自分の力を出し切って何かをし、それが他人が見て好感を持ってもらえる。これは何よりも一番大切なことだろう。」

と云っていました。私も同感です。

人間何かに自分を打込む事が出来た時には絶対成長するものである。私が今社会人として立派に生活出来るのも、ボールを投げられない状態である時にボールを投げるといふ事を教えて下さった先輩のおかげです。人間何かに自分を打込むということは言葉では簡単でも実際には難かしいものです。まして逆境にある時、例えばレギュラーという花々しい活躍が出来る時は誰でも野球は楽しいものです。しかし一度スランプに入ったりした時にはどうしてもそれを楽しむ事が少なくなります。だがこれを乗越える事です。栄光輝く甲南大学準硬式野球を志す人は、野球技術をマスターし、強くなると共に精神的にも大いに野球を通して成長してもらいたいものです。

## 「甲球会誌発刊にあたって」

第八回卒業 林 良三

長い間御無沙汰しております。

現役全員元気で野球に、勉学に精をだしている由?風のたよりで聞いております。小生も一・二度現役の人達と顔を合せましたが、その後、なかなか機会がなく面目なき次第、さて、現役当時のことについてと言われてもあまり良く覚えておりませんが、印象に残っているものだけピックアップします。

前主将の西田さんから引きついで総人員二十二・三名だったと思うが、まず当初の念願だった秋季リーグの優勝をめざしてチームワークよろしくスタートした。私には高原副将以下、小西マネージャー、原、坂野、佐々木(邦)、前田、木下の良き同期生と下級生の協力を得て、幸いにも優勝することが出来た。これは先輩各位のよきアドバイスもさることながら、チームが一丸となって戦ったチームワークの勝利でもあった。これに自信を持って、春には全員が思い切ったプレーで他を押し、連続優勝の喜びを味わうことができた。勿論、連続優勝までは苦しい時も、多々あったが、これも一瞬のうちに忘れ去ったものです。高原副将以下のテレタ様な笑い顔、後輩達の喜

びにあふれた顔、顔、顔、が今でもなつかしく思い出すことが出来ます。私の長い学生生活でも、特に当時の喜びにあふれた顔やその後の優勝祝賀会での皆んなの自慢話や失敗段も強く印象に残っている。いつまでも。その後夏には全国大会に参加したが一回戦で敗退し有終の美を飾れなかったのが私達の唯一の敗北感でした全国大会の優勝と云う夢を後輩に托し、バトンタッチをした次第です。

もう一つ印象に残っているのは、準硬式初の海外遠征に参加出来たことでしょうか。我が甲南大からは、当時四年生の西田さん以下三年の高原君と私の三人が選ばれたが都合で高原君と私が行くことになり（西田さんは辞退）約十五日間、沖縄に滞在しました。私の印象に残っているものを書いてみましたが、次ぎ次ぎに当時の出来事が思いだされて、思ったことの十分の一もこゝに書き表わすことが出来なくて、我ながらまずい文章になりました。悪しからず御了承願います。最後に御世話になりました先輩諸氏への平素の無音をお詫び致しますとともに、今後ともよろしく御指導、御鞭撻のほどお願い申し上げます。また、この記念すべき甲球会誌の発刊にあたり、甲南大準硬式野球部の一大発展を期待し、この甲球会誌の発刊が成功します様、心からお祈り申し上げます。以上

ベースもわかり、何とか過ぎました。今一つ忘れられないのは六日目頃に雨が降り、練習中止となった時の嬉しかったこと（叱られるかな・・・）。その時程雨音心地良く聞こえたことはなかった。現金なもので練習中止となると元気が出、数人で地獄巡りをしたのも良さ思い出です。

とに角。十日間自分なりに一生懸命やって無事に終わった時の、何とも言いようのない気持・・・ 以上

## 「私が野球部生活で得たもの」

第十回卒業 伊保 恒男

この度、甲球会誌が発刊されるとのことですが、現役編集員の努力は大変なものだったろうと思います。本当に御苦労様でした。立派な会誌が出来ますよう・・・又長く続きますよう・・・

野球部時代の思い出を寄稿せよとのことなので、早速アルバムなどを開けたりしました。春秋のリーグ戦、全日出場、合宿など次から次へと頭にうかびました。が、何と言っても印象に残っているのは初めて参加した別府での合宿でした。十日間体がもつだろうかと不安な思いで出発しました。案の生、一日目からランニング、グランドキーパー、練習、練習とこってりしぼられました。特に個人ノックをうけた時は、完全にグロッキーとなり、これからもつかなと心配したものでした。しかし苦しい反面、昼休みの時にベンチの上でゴロツと横になり、青空に向かって、タバコを喫った時の気持の良かったこと、夜の自由時間に上級生ともども“カブ”に力を入れたり、冗談を言い合ったりして過した時の楽しかったこと、又ミーティングの時のルールの勉強でこってりしぼられたこと、など練習以外にこうして部員と身近に接することが合宿の良い所の一つだと思いました。

練習も五日目迄がつかったが、それ以後は体もなれ、